

早馬町屋台（八朔屋台）

この巨大な木製の屋台は、毎年 9 月に開催される八朔祭で使用される、都留の伝統的な曳山（屋台）の 1 台です。祭りの間、市民は屋台を手で引いて町中を練り歩き、みこしに乗った人々が音楽や踊りを披露します。市の各地区にそれぞれ屋台があり、最も美しい装飾や素晴らしい芸を競います。これらの屋台は、約 2 世紀前の高価な羅紗やビロードで作られた、見事な幕がひととき目を引きます。浮世絵画家の葛飾北斎(1760～1849)のような、当時最も有名な芸術家による絵が特徴です。

この屋台は、早馬町が所有しています。作られた正確な時期は不明ですが、19 世紀初頭にさかのぼります。1920 年代後半まで使われていましたが、解体し、保存されました。半世紀後、早馬町の人々は、手で丁寧に再現し、1989 年の八朔祭で再び使い始めました。屋台の後方に張られた後幕は、「牧童牛の背に笛を吹く」と題し、北斎の筆によるとされています。みこしが動いているときは、柳の枝の絵も動き、まるで葉に風が吹いているかのように見せながら、笛の音を運んでいきます。